わたしたちの先生を紹介します

小坂啓史先生

子ども発達学科学校教育専修3年
宮崎瞳（みやざき　ひとみ）愛知県・名古屋市立北高校出身

小坂先生は保育専修の所属の先生でありながら、学校教育専修の学生に向けての講義を受け持つことが多いようです。そのため、学生から学校教育専修の先生だと勘違いされることが多い方です。実は私も例外ではなく、2年生の時に保育専修の先生であることを知りました。今年のゼミ生も学校教育専修所属の人が多く、毎年このような傾向があるようです。

ゼミでの先生は優しいお父さんのように、社会学をわかりやすく教えてくれます。わかりやすさの理由として、解説の際に映画が登場することがあげられます。先生の専門領域は福祉社会学なのですが、視覚や映像についても考えているそうで、映画に関する多くの情報をお持ちだからなのだと思います。

私は大学生になるまで、社会学を知りませんでした。先生によると、社会学とは『『現実』の多元性に気づかせてくれること、その楽しさのプラットホーム」とおっしゃっていました。聞いただけでは難しそうに感じますが、先生はとても分かりやすく説明してくれます。例えば、電車に乗った時にどこを見ているのか、これも学問になります。あなたは、車窓を見ていますか？隣にいる友達を見ますか？もしくは寝たりして、視線を送っていないという方ですか？電車に乗ってどこを見るのか、ということは日常生活の中での何気ないふるまいだと思います。こうした身近なところから、社会学という学問への入り口が開かれていることを教えてくれました。

小坂先生は「世の中で起こっていることは社会学で考えることができる」とゼミの中で力説しています。自分に好きなことはありますか？その好きなことに一緒になって社会学を通じて考えてくださる先生です。ですので、自分の興味のあること／ものを、社会学という学問を通じて見ていきたいという方におすすめの先生です。

ドミノ体験記

～成功ではなくやることに意味がある　～

子ども発達学科保育専修1年
佐藤美羽（さとう　みう）愛知県・西陵高校出身

私は、24時間テレビで行われるドミノ企画に、実行委員として参加させて頂きました。

プロの方に意見をもらいながら様々な仕掛けを考えるミーティングにも参加し、このドミノ企画に携わっているすべての人が本気で挑んでいることが分かりました。約3ヶ月という長いようで短く感じた期間に完成させたドミノは、この企画に携わっていないと分からないような感動がありました。

リハーサルや本番を含めた4日間は、体育館に朝から緊張感が漂い、チームドミナーに話しかけることもこちらが緊張してしまうほどでした。本番では、本番直前に仕掛けが崩れてしまったチーム、途中で止まってしまったチームなどもありました。本番に成功させるために、どれだけ頑張ってきたか近くで見ていたからこそ、とても悔しい思いもしました。でも同時に、「成功させることがすべてではなく、やることに意味がある」と考えさせられ、とても良い時間を過ごすことができました。また、今回の企画を通して大切な仲間もできました。こんな素敵な企画に携われたことを、とても嬉しく思っています！

新入生セミナーの様子

この号の主な内容

・新入生セミナー
・教育実習体験記　幼稚園実習　1
・施設実習体験記　乳児院および児童発達支援センター　2
・教育実習体験記　中学校実習
・教職インターンシップ体験記
・ゼミ活動紹介　吉原ゼミナール　3
・わたしたちの先生を紹介します
　小坂啓史先生　4
・ドミノ体験記

We Love こたつ

日本福祉大学　子ども発達学部ニュースレター

第20号 2018年12月12日発行

新入生セミナー

～新入生セミナーの企画にたずさわって～

子ども発達学科保育専修2年
内木綾乃（ないき　あやの）愛知県・西尾東高校出身

今回、新入生セミナーを仲間たちと作っていく際、1年生全員が多様な参加スタイルで楽しめる会にしたいと考え、それを企画の中心にすえて計画を立てました。実施までの道のりを振り返ってみると、様々な問題や課題がありとても大変でした。例えば、情報保障を目的としたプロジェクターの設置や、ゼミの整列する場所などです。また、どうすれば全員が楽しく参加できる競技になるかなど、実行委員で何度も集まり考えました。そうした実行委員一人ひとりの協力のおかげで、セミナー当日の充実した企画を実現することができたと思います。

今年の新入生セミナーは、ドッチビーとジェスチャーゲームをゼミ対抗で行いました。ドッチビーでは、気合いが入っているゼミ長をゼミの仲間たちが支えながら取り組んでいたり、担当のゼミの先生がコートに入って学生と一緒にプレーしたりと、ゼミによってそれぞれ特徴があって楽しかったです。また、応援をしたり、外野からスタートしたりと多様な参加スタイルで行えました。

ジェスチャーゲームでは、障害学生も一緒に楽しく参加できるように工夫をしたため、みんなで楽しく取り組めました。懸命にジェスチャーをしているのに解答者が答えられず困っていたゼミが少なからずありましたが、それも含めて笑顔で楽しめました。

今回の新入生セミナーを通して、各ゼミのメンバーの仲が深まったのではないかなと思います。新入生セミナーの開始時と終了時を比べてみると、終わりの会で整列したときに、みんなの顔の表情が、緊張から笑顔に変わっていたのが見て取れたのでうれしく感じました。また、解散時にはゼミごとに集合写真を撮っていました。今回の新入生セミナーをきっかけに、1年間、ゼミで楽しく過ごしてもらえたらと思います。

来年も実行委員のメンバーが責任を持って企画を立ててくれると思うので、来年度の新入生の皆さんも、今から楽しみにしていて欲しいと思います。

教育実習体験記　幼稚園実習

～教育実習（幼稚園）で学んだこと～

子ども発達学科保育専修4年
水野季依（みずの　きえ）愛知県・惟信高校出身

私が今回の実習で、印象に残っている事は2つあります。

1つ目は、子どもたちは私たちが思っている以上に周りを見ていることです。実習1週目でリトミックを行なった際、障がいを持つAちゃんを私が手招きをしながらリトミックの移動の仕方を伝えていました。Aちゃんは段々とできるようになっていましたが、最初のうちは手招きがないとその場に立ち止まって泣いてしまっていました。リトミックが終わり自由遊びになった際に、Bちゃんが私の所まで来て「先生のこと逮捕する！」と手錠をかける真似をしながら私の手を握ってきました。私は「どうして逮捕するの？」と聞くと「リトミックの時にAちゃんのこと、いじめてたから！」と教えてくれました。

子どもたちから見るとそう見えてしまったのか、Aちゃんはみんなの大事な仲間なんだ、と反省するのと同時に、5歳児の仲間意識の築きに感動しました。

2つ目は、甘えることの難しさと、甘えたい気持ちをどう引き出し、感じ取ることができるかについてです。何でも完璧に出来てしまうMちゃんが、散歩の際に「先生～～手繋ぎたい～～」と言ってくれました。しかし、安全面上、一番後ろにいた子どもたちについた方がいいと判断し、その旨をMちゃんに説明したところ直ぐに「分かった、大丈夫！」と言ってくれました。Mちゃんが始めて甘えてくれた瞬間だったのにと反省してしまいました。全て完璧にできてしまう子どもは甘えることを一歩引いてしまいます。その感情を読み取り、子どもたちが安心できる様な声掛けを行なっている先生方の姿を学びました。

4週間の中で、先生方と子どもたちの信頼関係の深さを知ることができました。先生方は、声掛けを細かく行い子どもたちが次の行動に自信を持って動けるようにしていたり、できないことを見つけるのではなく、できたことを見つけて自信に繋げる努力をされていました。子どもたちが笑顔で楽しそうなのは、子どもたちよりも先生方達が楽しそうにしているからだということを学ぶことができました。

保育実習体験記　施設実習

子ども発達学科保育専修3年
豊吉若菜（とよし わかな）岐阜県・済美高校出身

私が高校生のときは、保育園にしか実習に行けませんでしたので、施設へ実習に行けるとは思っていませんでした。そのため、大学で施設実習に行けたのはよかったです。

乳児院には、虐待された子、家庭の事情で施設で暮らしている子などがいて、兄弟全員が乳児院と児童養護施設に暮らしている場合もみられました。また、障害のある子や数ヶ月だけ養育される子もいました。生まれてから2ヶ月の首のすわっていない赤ちゃんがいて、抱っこもさせてもらえたのは貴重な体験になりました。大きい子でも2歳の子でした。赤ちゃんの抱っこのしかたやおむつの替え方など何も知らなかったことが、できるようになりました。乳児院では技術をマスターできました。保育園は時間に追われるイメージですが、乳児院は生活であり、食事など決められた生活リズムはありますが、ゆったりゆたゆたしていました。

児童発達支援センターには、自閉症、ADHD、母音でしか話すことのできない子や天邪鬼な子などがいました。今まで障害のある子どもと関わったことがなかったので、センターでは、どのように声かけしたらよいか、どうしたらこの子は動くのか、常に考えて働きかけました。いかにやる気にするかを考えました。私の対応について、職員さんから「ダイナミックだね」と言われました。

実際に施設2カ所で実習をしてみて、このような世界があるということを肌で感じることができました。知らないことを知ることのできる体験でした。

教育実習体験記　中学校実習

子ども発達学科学校教育専修4年
髙井翔子（たかい しょうこ）長野県・伊那弥生ケ丘高校出身

母校である長野県伊那市立伊那中学校で、2週間の中学校実習をさせていただきました。配属されたクラスは3年生でした。大学3年次に行った小学校実習では、配属されたクラスで授業を行っていました。しかし、中学校では教科ごとに担当が決まっているので、他のクラスでも授業を行いました。そのため、配属されたクラス以外では関係が築けていない状態からのスタートだったので、大変難しいと感じました。

それに、配属されたクラスで良好な関係が築けていたのかというと、そういうわけではありませんでした。中学生になると、子どもたちから「先生遊んでー！」と近づいてくることはほとんどないからです。また、配属されたクラスの子どもたちでさえ、関わることができるのは1日の中で、朝の会、給食、帰りの会と1～2時間の授業しかありませんでした。初めは、小学生との違いに驚いて自分から行動することができずにいました。しかし、実習期間が2週間ということもあり、早く仲良くなりたいという思いでとにかく話しかけました。一方通行だった子どもとのやり取りも、次第に会話になってくるのが分かりとても嬉しかったです。

担当教科の社会では、2年生の歴史と3年生の公民を担当しました。私が中学生だった頃は社会というとひたすら板書を行う授業でしたが、それも変わりつつありました。1時間の授業の中で重要語句を押さえるとともに、子どもたちに考えさせる場面を必ず取り入れていました。そうすることで、一方的な歴史の解釈ではなく、子どもたちなりの幅広い解釈も可能になるのです。子どもたちが授業を受けて感じたことや思ったことを否定するのではなく、それを受け止め、深めていくことが大切であると学びました。

実際に子どもたちを目の前にして実習を行うと、上手くいかないことばかりでした。しかし、なぜかもっといい教師になりたいと強く思わせてくれる場でもあります。どのクラスに配属され、どんな子どもたちに出会うのかは巡り合わせです。指導教諭の先生も含め、多くのことを学ばせてくれる方々に出会うことのできた実習でした。ここからをスタートとして考え、教師として成長できるように邁進してきたいです。

教職インターンシップ体験記

インターンシップを通して
～障がいがあっても児童の学びに関わるためには ～

子ども発達学科学校教育専修2年
森田瑞生（もりた みずき）岐阜県・岐阜聾学校出身

学校教育専修のインターンシップが5月から始まりました。私は、聴覚障害を抱えていますので、クラスの児童とコミュニケーションがとれるか不安だらけでした。当初は、各教室がざわざわしている環境のなかで、児童の声がかき消されてしまい、私自身が児童の声を聞いてから何を言いたいのか聞き分けづらく(意図をとらえるのに時間がかかるといった)、分からない環境に陥ってしまいました。そこで、自分から1対1で会話を理解できる環境を作り、ゆっくり話し合うことでお互いに分かり合えるようになっていきました。こうすることで、正面から話しかける機会が増え、目が合うことが多くなりました。

また、授業中に元気がなさそうな児童を見つけたときに、どうやって元気づけたらいいのか分からなかったり、子どもたちがはしゃいでいるときや落ち着きのない行動をとった際の対応など、様々な場面を経験したことは、今後の教育実習においても課題だと感じました。

いずれの経験も子どもたちに身近なところから彼らの気持ちを深く考えるきっかけとなり、今までの講義で学んだことを活かすことが出来るのではないかと考えています。

私は、健常者と聾者の在り方を差別として扱わないことが大切だと考えています。それぞれの立場を知るうえで、一人ひとりに合った指導をすることが学ぶ権利を大切にしていくことにつながるのではないかと思います。

自分の考えていることを児童に伝えることは難しいと思いますが、分かりやすく伝えられるスキルを身につけたうえで、「あれ」「これ」といった曖昧な表現はできるだけ使わず、また、その場の雰囲気に流されずに自分の考えていることをはっきりと意思表示できる努力をしたいと考えています。つまり、コミュニケーションと言うよりも伝えようとする気持ち(姿勢)が大切ではないかと考えています。そうしなければ、次の行動や行為を起こせず、前向きな声かけも出来ないままになってしまうからです。ですから、児童と触れ合う機会を増やしつつ、児童から話しかけられるのを待つのではなく、自分から前向きな、先を見通した呼びかけといった小さな心配り、いうなれば「気づき」が大切ではないかと思います 。

ゼミ活動紹介

吉原ゼミナール

心理臨床学科心理臨床専修4年
齋藤萌（さいとう もえ）愛知県・鳴海高校出身

吉原先生は、主に社会心理学を研究分野として様々な活動をされています。日本福祉大学では、「社会心理学」や「心理学統計法」、「多変量解析」、「心理学実験・実習」などの授業を担当されていて、特に心理臨床学科の私たちの中では「統計法と言えば吉原先生！」というイメージが強く根付いているくらい、統計法などを学ぶにあたって特に吉原先生にはお世話になっています。吉原ゼミでは、3年生は卒論のテーマを見つけていくことを目指し、まず様々な論文に目を通し毎回のゼミで順番に自分の読んだ論文のまとめのレジュメを作成し、発表していました。後期に入ると卒論に向けての個人指導もゼミの中で行っていただき、親身になって話を聞いていただきました。4年生になると、各自卒論に向けての準備が始まりますが、前期は進捗も含め、自分の卒論についての発表を行っていきました。質問紙作成や調査にあたって丁寧に指導していただいたり、ゼミの時間以外でも相談に乗っていただけるので、とても心強いです。

吉原ゼミに入る前までは、吉原先生は普段はすごく落ち着いていて、とても真面目な方であるというイメージでした。しかし、吉原ゼミに入って先生と関わっていくなかで良い意味でイメージとは異なり、積極的にゼミコンを開こうと提案してくれたり、ゼミコンでもいろんなゼミ生と楽しくお話ししていたりと、普段は見られないような吉原先生の様子が新鮮に感じることもあります。今年度は縦コンも開催され、3･4年生の交流もできて卒論や就活の情報交換など、意味のある交流ができたと思います。

吉原ゼミの雰囲気としては、「和気あいあい」というよりも、落ち着いた雰囲気で行われています。誰かが発表しているときは、しっかりと話を聞くことができ、誰がどのような研究をしようとしているのか、研究の進捗などもしっかりと聞くことができるので、自分のことだけでなく、同じ仲間であるゼミ生の状況も把握できてみんなで進められている感じがして、とても良い環境で行われているなと思います。また、ゼミコンなど楽しむところは楽しめるといったようなメリハリがきちんとあるので、やるときはやるというゼミだと感じています。そういった環境の中で吉原先生やゼミ生の仲間たちと卒論に向けて頑張っています 。